「常呂町の造材流送作業」（抜粋）　小林秀康

昭和10年代の造材作業と流送作業

常呂町高齢者大学「平成元年度オホーツク大学文集トーコロ」掲載

昭和5、6、7年は大凶作でした。5年は大干ばつ、6年は寒くて海岸のごとく風が多く、7年は天気が良く喜んでいたところ、取り入れ時期に長雨が降り、60日近く降り、常呂川は2回も大水が出て大変な年になりました。農家も食べるものがなく、政府から払い下げ米を受けました。家計費、小づかいがなくなり、私も20才の年に初めて冬山に働きに出なければならなくなりました。

当時、上杉眞治さんという人は前の町長上杉町長さんのお父さんで、経済力最高で漁業もやり、農産物を買い入れ商業もしていました。また、今の中台外科医院の所で郵便局もやり郵便局長、また村会議員、造材もやりまして、その材木を遠く本州方面の大きな木工場に売って大きな利益を上げていたそうです。

パルプ（紙材）の造材場所は、今の福山小学校の裏の沢です。（当時は太茶苗といっていました）沢の入口には大きな松の木がたくさん茂っています。沢伝いに奥へ進むと途中に夏の間に切った丸太の山が何ヶ所も積んでいるのが見えました。雪が降る前に切ったのでしょう。

今はチェンソーという機械ですが、当時は手ノコで引いたそうです。

網走と常呂の境まで行きました。片側の山を見ますと、天まで届くかと思うほど伸びて、松の木の下は日中でも暗いくらいに茂っていました。

その時に土佐部落からは6名が働きに行きました。ようやく飯場に到着しました。他の部落からも何人か来ていました。遠い仁倉からも来ていました。全部で50～60人くらいと思いました。

当時の飯場賃金は3食で80銭

タバコ（バット10本入　7銭

ようかん1本　5銭

ハガキ1枚　1銭5厘

米1俵　6円50銭

私たちの出面賃は1日6円で、上位の人は6円50銭くらいでした。当時のお金、紙幣は10円札、20円札でした。10円札はイノシシ札と言っていました。

しかし、毎日働くことができない。というのは、月に2回は吹雪があり、今はブルで除雪をしますが、当時は50～60人くらいの人夫がスコップで、平均1メートルも積もった雪を6キロ（1里半）も除雪しました。大雪の時は2日、3日かかって道を開けるのです。そして、木材を福山小学校の前の川の縁まで運搬します。毎年1月初めから3月半ば頃まで馬そりによる運搬で、川の縁には日々木材の山ができます。

4月頃になり、川の氷が溶ければ流送が始まります。川に木材を落とし、今の篠田歯医者の下の所に、岸から岸へ太いワイヤーロープを渡して木材を溜めるのです。今の役場の裏の川から共立入り口まで木材が並んでいました。

そして、沖には大きな積み取り船が入っていて、溜めていた木材を5～6本ずつ縛って10個から15個くらいにして発動機船が曳いて積み取り船に運び、ウインチで引き上げて船

に積み、1ヵ月くらいかけて全部積んでしまいます。毎年こうした方法でやっていました。
（略）